

2023年3月19日

四旬節第4主日A

菊地功大司教 メッセージ

ヨハネ福音は、イエスが安息日にシロアムの池で、生まれつき目の見えない人の視力を回復するという奇跡を行った話を記しています。

この物語には、「見える」ということについて二つの側面が記されています。それは、実際に目で見ることと心の目で見ることの違いです。

それを象徴しているのは、今日の福音の終わりに記されている、目が見えるようになった人とイエスとの会話です。視力を回復した人には当然イエスの姿が見えていますが、それでもなおその人は、「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」とイエスに問いかけます。目の前に神の子は立っているにもかかわらず、見えても見えないのです。その心に向かってイエスは語りかけます。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ」。

心の目を開かれたこの人は、「主よ信じます」と信仰を告白します。

見えているのに見えない状態とはどのようなことなのか。福音はその少し前に、ファリサイ派の人たちと視力を回復した人とのやりとりを記しています。奇跡的出来事が起こったからこそ、この人を呼び出したにもかかわらず、ファリサイ派の人たちは、自分たちが作り出した枠を通してしか物事を見ることができていません。その枠からはみ出すものは、存在しないのです。ですから逆に、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と、いまの言葉で言えば逆ギレしたかのように裁きます。わたしたちは、自分の価値観に基づいた枠を作り出し、それを通じてのみ現実を知ろうとします。

同様なことがサムエル記に記されています。ダビデの選びです。預言者サムエルに、「人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」と神は語

りかけます。

今年の四旬節メッセージでシノドスの歩みに触れた教皇様は、こう記されています。

「四旬節のためのもう一つの道しるべです。それは、現実と、そこにある日々の労苦、厳しさ、矛盾と向き合うことを恐れて、日常と懸け離れた催しや、うっとりするような体験から成る宗教心に逃げ込んではいならない、ということです」

人間の思いが生み出した枠を通じてのみ現実を見つめることも、また、宗教に逃げ込むことにつながります。わたしたちは、心に語りかける主の声に耳を傾け、枠を捨てて主ご自身をまっすぐに見つめるように招かれる主に信頼し、主とともに歩んでいきたいと思いをします。